

低温に関する異常天候早期警戒情報に伴う 農作物の管理対策

平成29年 8月30日
新潟県農林水産部

新潟地方気象台が8月28日14時30分に発表した「低温に関する異常天候早期警戒情報（北陸地方）」によると、9月2日頃からの1週間は、気温が平年よりかなり低くなる確率が30%以上と見込まれています（7日平均地域平年差 -2°C 以下）。
今後の気象変動に十分留意し、下記の管理対策の徹底をお願いします。

記

1 水 稲

(1) 収穫適期の判断

ア 収穫適期は、黄化籾割合が85~90%くらいになった頃である。低温が続くと、登熟が遅くなる可能性があるため、下表の出穂後積算温度をめやすに、必ず籾の黄化率を確認し、適期に収穫する。

イ コンバイン収穫を容易にするため、落水後においても降雨の影響で田面が柔らかい場合は、周囲に溝を掘るなどし、土壌の乾燥を促進する。

表 収穫適期のめやす

熟期	品種	出穂後積算温度（ $^{\circ}\text{C}$ ）
早生	こしいぶき、わたぼうし、五百万石	975
早生	ゆきん子舞	950~1,000
中生	コシヒカリ、こがねもち、新潟次郎	1,000
晩生	越淡麗、いただき	1,000~1,050
晩生	新之助、あきだわら	1,050~1,100

注：出穂後積算温度は、出穂期の翌日から起算する。

(2) 水管理

中・晩生品種については、出穂期25日後までは根の活力を保ち、土壌からの窒素供給を図り登熟を向上させるため飽水管理を行う。

2 野 菜

(1) なすやきゅうりなどの果菜類で草勢が低下している場合は、若もぎ等により着果負担を軽減し、液肥等の葉面散布により草勢を回復させる。

(2) 施設栽培のトマト・きゅうりで、一時的な強日射や高温により日焼けや落花の発生が予想される場合は、寒冷紗などで遮光を行う。

(3) トマトはうどんこ病・灰色かび病、きゅうりはべと病・灰色かび病の発生が懸念されるため、発生状況に応じて迅速な防除を行う。また、いちごは、定植時にうどんこ病をハウス内へ持ち込まないように、育苗床での防除を徹底する。

- (4) えだまめは、草勢の低下により葉色が落ちてきたほ場では、液肥の葉面散布を行い草勢の維持と莢品質の確保に努める。また、選別時は、炭疽病や赤かび病による出荷後の腐敗を防止するため、変色が見られる莢の除去を徹底する。
- (5) アスパラガスは、斑点病や茎枯病が多発しているほ場では、薬剤防除による病害の拡大防止と若茎の間引きによる根株の養分確保を図るとともに、ほ場内の通風改善に努める。
- (6) 夏ねぎは、茎盤部（根元部分）の褐変や腐敗、新葉付近のよどれが散見されるので、出荷物に混入しないよう選別時には十分注意する。また、黒斑病や葉枯れ病等の茎葉病害が増加しているため、定期的な防除や土寄せ後の防除を徹底する。
秋冬ねぎでは、追肥や土寄せが遅れないよう、生育に合わせた管理を実施する。
- (7) だいこんは、低温が続いた場合に「わか症」の発生が懸念されるため、9月中旬以降は発生原因となる白さび病の防除に努める。特に、9月下旬から10月上旬までの防除を徹底する。

3 果 樹

(1) 果樹全般

ア 翌年の花芽充実や樹勢の安定化等を図るため、徒長枝の間引きや誘引等の新梢管理を徹底する。

イ 成熟期の低温で、収穫期までの満開後日数が必要以上に経過している場合があるので、収穫が遅れないよう定期的な収穫前果実調査（糖度、硬度、果皮色等）を実施し、収穫適期を的確に判断するとともに、出荷の際は選果を徹底し、出荷基準を遵守する。

(2) か き

ア 着色始日が早まる可能性があるので、生育情報に注意して収穫前の反射マルチ設置や草刈りを遅滞なく進める。

イ 着色の進展とともに日焼け果の判別が困難となるので、日焼け果の早めの摘果を徹底する。

(3) 日本なし

ア 黒星病、黒斑病の発生園では、落葉やり病枝、り病果実を園外へ搬出して適切な処理を実施する。

イ 収穫を終えた品種で礼肥が遅れると、低温感受性の低下を助長するおそれがあるので、速やかに施用する。

(4) 西洋なし

ア 収穫時期が早まり、追熟期間も短くなることが予想されるので、適期収穫と適切な追熟温度管理が実施できるよう早めに準備を行う。

イ セイヨウナシ褐色斑点病の発生が見られる園地では、徒長枝整理など耕種的防除を実施するとともに、セイヨウナシ黒斑病の発生も見られることから防除を実施する。

(5) ぶどう

ア 裂果、晩腐病が発生している園地では、商品に混入しないよう出荷調整を丁寧に行う。

イ べと病が発生している園地では、収穫後の防除を徹底し、早期落葉を防止する。

(6) もも

ア ヤワ果（果肉軟化）の発生が多くなっているため、着色にとらわれず、収穫を進める。

イ せん孔細菌病の発生園では、秋季（収穫後）防除を徹底する。

4 花 き

(1) 切り花類・鉢物類

ア 日照不足により生育が軟弱傾向になっているため、過度な遮光を避け、天候に合わせたこまめな遮光資材の掛け外しを実施する。

イ 天候が回復した後の高温や強日射により葉焼け等の生理障害が発生しやすいので、気象情報に留意し、発生が予想される場合は事前に遮光や換気を行って発生を防止する。

ウ 降雨や気温低下により病害が発生しやすいので、適時適切に防除する。特に、葉焼けの発生後は、病害が発生しやすいので防除を徹底する。

(2) ストック切り花

ア 苗の定植後は、ほ場が過湿状態にならないよう、かん水や排水対策など水分管理に注意する。

イ 9月上旬の低温により花芽分化が促進され、一斉開花となるおそれもあるため、気温の推移に十分注意し、必要に応じて夜間のみハウスを閉める等の保温を検討する。

(3) ユリ切り花

気温の推移に十分注意し、オリエンタル系ユリでは最低夜温15℃を目安に早めに保温の準備を行う。

5 飼料作物

(1) 牧草では、生育停滞及び刈取り適期の逸脱等により収穫量の減収が懸念されるため、今後、気象変動に即応した適切な収穫調製と収穫後は速やかに追肥を行い牧草の再生を促進する。

(2) 飼料用トウモロコシは、排水対策を徹底する。また、生育遅延により登熟の遅れが懸念されるため、収穫に当たっては子実の熟期を確認し黄熟期での適期刈取りに努める。

6 き の こ

(1) 気温の低下が懸念される場合は、品種や生育状況に応じた適切な温度管理に努める。

(2) 生育状況の把握に努め、異常が認められた場合は、適切に対応する。